

布玩具魚つり遊びに見られる幼児の発達段階
の違いと効果的な指導法について

会津大学短期大学部
社会福祉学科
郭 小蘭

布玩具魚釣り遊びに見られる幼児の発達段階 の違いと効果的な指導法について

郭 小蘭

平成28年1月10日受付

【要旨】 本研究は操作遊びの布玩具魚釣り遊びをゲーム形式で3、4、5歳の幼児がどのように取り組むか、また、指導者の側としてはどのように興味を引き出し、指導するかを用意された遊び場で参与観察した。研究の目的は①布玩具魚釣りあそびから子どもの発達段階の違いの具体像を実例研究で明らかにすること。②子どもの年齢に応じた操作遊びの効果的指導法の具体像を明らかにすることである。目的①の結果は、3歳児は、多くは最初は長い竿を持ってじっくり釣っていたが、徐々にしゃがんで身を乗り出して、手で釣り針を持って引っかけるなど、自分なりに工夫する姿が観られた。4歳児は短い竿を試し、たこ糸を短く巻き、釣り方に工夫する姿が観られた。また、顕著な個人差が見られた。5歳児になると、釣りの技術が上達し、長い竿を使うことができた。また、釣竿で魚を自分の方へ引き寄せたり、友達と会話したり、糸の絡み合いを楽しんだり、はしゃぎながら釣り遊びをしていた幼児が多く見られた。また、年齢を問わずすべての幼児がゲーム感覚で魚釣り遊びの雰囲気を楽しめることができた。目的②の結果、効果的指導法については、見守り、共感、励まし、称賛など誘導的な指導法の方が幼児の学習の動機づけとして大きな効果があり、魚つりのコツを直接教えることは幼児の年齢段階においては適切な指導法でないことが明らかにされた。

【キー・ワード】 3, 4, 5歳児が対象、発達段階と学習の特性、効果的指導法、実践的な実例研究、布玩具

問題と目的

1. なぜ、布玩具の研究開発をするのか。

幼児教育の定義について、文部科学省中央教育審議会の「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」（答申案、2005）を参照し述べる。「幼稚園教育（幼児教育とほぼ同義の意味で使われていることが多い）とは、幼児期の発達の特性に照らして、幼児の自発的活動としての遊びを重要な学習として位置づけ、幼稚園教育要領に従って教育課程が編成され、教育の専門家である教員の援助によって、適切な施設設備の下に組織的・計画的な指導を環境を通して行うものを言う」。幼児期の教育者を養成する大学の教員として筆者は幼児教育の趣旨をしっかりと理解した上で、研究及び教育することが自分の専門家としての使命であると考え。では、どのように研究していけば、教員養成の目的達成だけではなく、幼児教育の現場にも役立つことができるだろうか。筆者は8年前から本学の「特別演習」という科目でゼミ研究指導のテーマを「布玩具の研究開発」にしてきた。その理由は幼児教育現場では人形やおんぶ紐があるが、他の布玩具が少ないからである。乳幼児用の玩具として布製のものが安全性、手触り感、色のバリエーションが魅力的であり、工夫次第で製作しやすいものもある。乳幼児の興味・関心を惹きつける遊具であると考えている。一つの例として「リカちゃんの1日」の布絵本が効果についても検討している（郭、2014）。

2. なぜ、魚つり遊びを本研究でとりあげるか。

「保育実践研究 郭ゼミ」の平成27年度のゼミテーマは「保育実践力の向上」であった。学生の保育実践力の習得機会は主に実習であり、就職活動のための自主的な体験学習やボランティア活動以外はほとんどない。在学中、保育士の模擬体験ができないだろうか、PDCAの実体験ができないかという問題意識を持った。筆者の仮説は「学生とともに布玩具の企画、設計、製作、保育園で実践する、問題点を改善して、また、2回くらい再実践する。この過程の中で学生の幼児理解とPDCAに対する理解が深まっていくことができる」であった。ゼミ生の保育実践力の向上を指導のねらいとして考え、8年前から郭ゼミの指導内容は一貫して「布玩具の研究開発と、布玩具を用いて保育園で保育を実際に行う」という内容であった。平成27年度の布玩具は魚つり用の玩具であった。製作された布玩具が子どもの発達に適しているかを福島県会津若松市内にある3つの保育園で実験し、検討した。その成果物は平成27年度郭ゼミの卒業論集『保育実践研究卒業論文集2015』（郭編著、2016年2月10日発行）である。『保育実践研究卒業論文集2015』のねらいはゼミ生の「保育実践力の向上」であった。筆者は編著者として最初の学生に対する指導計画書の作成から途中の論文の考え方に関するゼミ生への指導、最後の論集の構成企画まで布玩具の製作を除いて全部かかわっていた。本研究は卒業論集の一部分（一つの保育園のデータ）を用いて違う視点（次の3を参照）から論じる。

3. 魚つり遊びと「操作」との関係に着目して

本研究の目的は魚つり遊びと「操作」との関係に着目して幼児期の認知発達と学習に深くかかわる操作遊びの効果的な指導法を探ることである。

幼児の操作遊びを研究するにあたって、まず、ピアジェの発達理論がよく知られている。ピアジェの「発達段階説」は「保育の心理学」という教科内容の一部であり、幼児理解の根幹的理論である。しかしながら、年齢による発達の変化や変容はよく知られているが、「操作は知識の獲得の本質である」（ピアジェ（芳賀訳）、1989）というピアジェの言葉が発達段階説ほどよく知られていないように思われる。また、同様に「操作を通して知識を知り、理解を深めていく」（シュミット（野村訳）、2014）というブルーナーの言葉があり、教

育方法論（小学生以上の子どもが対象である）という領域で研究が数多く行われているが、就学前児を対象とする研究は筆者の調べた範囲では少ないように思われる。藤田（2007）の研究テーマは魚釣り遊びと関係があるが、着目点は論文テーマにあるように「魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動：交互交代の基準と主導者に着目して」であった。阿南文・山内光哉（1989）の研究は、研究対象が幼児ではあるが、「幼児の遊びにおけるルール共有過程の分析」が論文の目的であった。湯澤正通・湯澤美紀・渡辺大介（2006）の研究テーマは「認知的道具の自発的使用と内化による概念発達：量概念の発達における重ね合わせと数の役割」であり、鈴木忠（1991）の研究テーマは「幼児の空間表象と身体定位効果」である。湯浅阿貴子（2015）の研究テーマは「幼児のゲーム遊びに生じる「ずる」の実態と仲間との相互交渉による意識の変容—縦断的観察からのエピソード分析から—」である。

なぜ、「操作と関係がある幼児の指導法」という研究が少ないだろうか。筆者の考えでは、幼児期の教育方法の特徴は生活と遊びを通しての教育であり、このことと関係するのではないかと考える。実験方法では普段のありのままの生活や遊びに見られる幼児の行動観察が難しい。参与観察は幼児研究に適している。結城（1998）の著書『幼稚園で子どもはどう育つか—集団教育のエスノグラフィー』から幼児の集団教育に関する学びが多くある。しかし、結城の著書は1998年であり、2016年の今は「個人情報保護」「研究倫理遵守」「マイナンバー」の導入など、社会の動向が変わり、保育現場の了承だけでなく、子どもの保護者からの了承を得る必要があるケースもある。子どもの生活や遊びで見せたありのままの姿を公表するのが難しくなってきた。参与観察を行うにあたって約束事を明確化し、研究が個人に被害を及ぼすことがなく、社会貢献のためであるということをよく理解していただくことが必要である。協力園と信頼関係が築かれていない研究者は協力のお願いをしても了承が難しい場合がある。

研究状況が難しいからこそ未知のことが沢山あり、それを研究する必要性を感じる。近年『幼児教育の方法』（民秋など、2009）という本が出版されたが、具体的な知的遊びに関する事例がなかった。こういう意味で本研究の成果は保育学、幼児教育方法学、発達心理学など、学問の領域に貢献できるだけでなく、保育士養成校の授業の教材資料としても使えるので独自性がある貴重なデータである。

4. 操作能力と幼児の発達段階との関係に着目して

ピアジェの発達段階を見る主な尺度は子どもの年齢である。実際の遊びの中で具体的にどのような違いがあるかを実践研究で検証する必要性があり、数多くの研究がある。理論の検証するには統制された条件の中で行われた研究であり、大量のデータ分析が必要である。どんな課題で検証すればいいか。しかも、その課題は子どもの生活と遊びから離れたような課題ではないのが必要であろう。そういう状況の中で、本研究は試行錯誤的に「布玩具魚釣りあそび」が子どもの発達段階の違いを見ることができるかを実例検討で明らかにしたい。また、違う年齢の子どもに対する援助や指導の方法が異なるだろうと仮説して、実際にどのように違うかを実例で明らかにしたい。

5. 研究の目的

①布玩具魚釣りあそびから子どもの発達段階の違いの具体像を実例研究で明らかにすること。②子どもの年齢に応じた操作遊びの効果的指導法の具体像を明らかにすることである。

方法

1. 研究対象園 福島県会津若松市にある会津若松保育協会若松第一保育園

実験観察対象は会津若松保育協会若松第一保育園児3歳（男の子4人、女の子4人）、4歳（男の子4人、女の子4人）、5歳（男の子4人、女の子4人）、合計24人であった。研究結果の公表について承諾を得ており、研究倫理上の問題がない。

2. 観察内容と指導法 布玩具魚釣り遊びをどのように遊ぶかを年齢別に自然観察と参与観察をした後、20分間ゲーム形式で布玩具魚釣り遊びを2回行った。布玩具魚釣りゲームは特につりの仕方については制限がなく、長い竿と短い竿を用意し、四角い水色の海の中の魚を先に全部釣り上げたチームが勝ちというルールである。ゲームの間も指導者は共感、激励や称賛したり、長い竿が難しい幼児には短い竿はどうなどのアドバイスをしたりした。

布玩具魚貝類・箱の製作（詳細は省略）

幼児教育現場では布玩具魚釣り遊びは筆者の調べた範囲内でなかった。紙での魚釣り遊び、2枚のフェルトで作る布魚、プラスチック製の竿がインターネットでの掲載が少しあるが、極めてリアルな魚つりに近い布遊具がなかった。上述した課題を克服するために本研究は写真（赤組用）と写真（青組用）の遊具をゼミ活動で製作した。



赤組用



青組用

3. 魚釣り遊びの指導計画案作成と観察・記録ポイント作成

指導計画案作成について

実験の順序：自然観察（両チームが全部の魚貝をつれたところでタンバリンを鳴らして終了を知らせる。予定時間は5分である）→参与観察（幼児が移動して自然観察で使っていた魚介セットを交換して行なう。援助が入る）→ゲーム1（一つのチームが全部の魚介を釣れたところでタンバリンを鳴らし、終了を知らせる）→ゲーム2（幼児が移動してゲーム1で使っていた魚介セットを交換して行なう。）魚介セットを交換する理由は幼児が違う魚を釣りたいかもしれないという気持ち、ゲームの場合は勝ち負けの公平性に対する配慮にある。幼児は布魚釣り遊びを30分以内で4回行うことができる。すべての年齢は同じ条件で行う。

環境構成：赤組用と青組用の写真を参照する。竿は2種類（40センチと20センチ）。糸の長さ（55センチと27センチ）。海をイメージするよう水色の四角い箱を用意する。箱の中に砂、透明の石、本物の石、海藻、魚・貝類合計26個を2つのセットにそれぞれ13個ずつ入れて用意する。

指導法：自然観察では指導者が糸の絡み合いを取る手伝い以外は援助せず見守る。参与観察やゲームでは援助が要る幼児に「短い竿を使うか」と聞き、幼児の意思で決める。釣りにくい魚を石にのせてあげる。魚

の向きや魚の口のモールを釣りやすいように調整してあげる。活動の展開は用意された魚貝セット（赤と青の2セット）の遊具の前に、それぞれ女の子2名、男の子2名が来て座って学生の導入の話を聞く。導入の言葉は観察の場合には「魚つり遊びをしたい。タンバリンを鳴らしたら終わります」。ゲームの場合には「赤チームと青チーム。どちらのチームが先に全部の魚をつれたかを勝負します。タンバリンを鳴らしたら終わります」。

観察・記録のポイントについて

記録内容は幼児の表情や言葉から布玩具魚つり遊びへの関心・やる意欲。幼児が「簡単または難しいか」と感じる着目点やコツ探し。つり続けるか。予備実験を行った後、長い竿と短い竿の両方を用意した。

実験の実施者：筆者と筆者が指導するゼミ生6名。

実験日：2015年12月17日9:30-11:30。

結果と考察

1. 年齢による発達段階と学習の特性の具体像について

保育実践というアプローチから幼児理解と幼児の指導法を探るのが本研究の独自性の一つであるため、幼児の発達と学習の具体的な姿が分かるように詳細な記述をする。



3歳児（短い竿を持つ）



4歳児（短い竿の糸を巻く）



5歳児（竿と糸の角度の安定）

3歳児については、自然観察時間が5分と設定したが、実際は4分くらいで全部の魚介が釣り上げられた。ゲームの時間はゲーム1が4分で終わり、ゲーム2が2分40秒で終わった。3歳児の発達と学習の姿は長い竿を握り手で針をもってひっかける子が多かった（8人のうち5人）。短い竿を使った子（8人のうち2人）、残りの1人は長い竿と短い竿の両方を使ってみた。

4歳児については、自然観察時間が5分と設定したが、実際は3分くらい全部の魚介が釣り上げられた。ゲーム1の時間が約3分、ゲーム2の時間が4分で終わった。4歳児の発達と学習の姿は個人差が大きく見られて、糸が竿にくっついたままで釣った子、手でひっかける子もいた。他は短い竿か糸をもって釣っていた子が8人のうち7人であった。また、魚を自分のほうに持ってくる子、竿の先を持つ子、短い竿の糸を巻き、ひっかける子もいた。4歳児のRさんとPさんの釣り方が興味深いので2人に焦点を当てて、詳細に記述する。まず、Rさんについては、自然観察場面とゲーム場面では以下のような姿が見られた。早いスピードで糸を竿に巻き込み、糸を最大限に短くして多くの魚を釣れた。魚が最後の1匹のときに隅にあるのに気づかず本物の石を釣ったり、他の石を引き寄せたりして隅にあると気づいた途端魚をまた釣り始めたという姿が見られた。一方、Pさんについては、長い竿でじっくり釣り、手を変えたり、体の角度を変えたりして、釣りらしい釣り方でじっくり釣っていた。釣れた数は1回目で3匹、2回目で2匹、合わせて大きい魚5匹を釣り上げた。釣れた魚の数は平均的である。Pさんは「どの竿が使いやすいか」という指導者のチームへ

の質問を受けてからも長い竿を使い続けた。「大きい魚だ」と釣れた時のPさんの声、手や体の角度を変えて釣りの工夫をした姿、別のチームがすでに釣り上げたという声を聞いてからも笑顔で釣り続けていた姿、ゲーム終了後魚セットから最後に離れたという姿が見られた。

5歳児については、自然観察時間が5分と設定したが、実際は予定よりも長くて8分40秒であった。ゲーム1の時間が3分くらいでゲーム2の時間が約2分10秒で終わった。5歳児の発達と学習の姿は、5分予定の自然観察では全員長い竿を握って会話をしながら釣っていた。「難しい」という声があった。実施者の援助があり、短い竿に変えてやり、残りの魚を早く釣り上げた赤チームに対して、青チームは釣り針に手で糸を持って近づけ(2人)、釣り針を持って直接にひっかけて「ずるするな」と友だちからの注意を受けてもやり続けた子(1人)、魚の位置を変え、自分の体の角度を変える子(3人)がいた。会話を楽しみ、糸の絡み合いを楽しみながら釣っていたA君が集中して釣ったときに長い竿で4匹も釣れた。

2.3歳, 4歳, 5歳児の特徴に関する考察

自然観察時間では、どの年齢も自然観察の時間が約5分と設定したが、実際の結果は4歳児の糸が短かったためもあり、時間が短かく、5歳児は釣りらしい仕方で行ったことと友だち同士で糸の絡み合いを楽しんでいたことなどのため、かかった時間が一番長かった。ゲーム時間では、5歳児のゲーム2の時間が2分10秒から分かったことは5歳児はつり以外のことをやりながらも3歳児、4歳児よりは早かったことである。布玩具魚釣り遊びの難易度では、手で針をもってひっかける→短い竿か糸を持つか→長い竿で位置や角度を変えながらつる、というような順序が見られた。年齢による指や腕のコントロールする力の違いが見られた。ゲームで楽しむときには、5歳児はこれらの方法を察知し、勝つために何種類の釣り方をしたり友だちと会話を楽しんだりする特徴も見られた。上述したような幼児の発達過程と学習の特性が見られた。4歳児では個人差が顕著に見られた。幼児期の学習は子どもの発達過程と個人差を踏まえた上で子どもの主体的な遊びを通して行われるものであると実験から実証された。

3. 幼児の遊びの指導法についての考察

幼児教育は環境を通して、遊びを通して総合的に行われる。見守り、共感、励まし、称賛など誘導的な指導法が幼児の学習の動機づけとして大きな効果があり、魚つりのコツを直接教えることは幼児の年齢段階においては適切な指導法でないことが分かった。この結論は以下の結果から得られた。

「見守り・共感・励まし・称賛」は幼児の学習の動機づけとして効果があった。魚の数が釣れなくても集中して釣っているときに見守り、釣り上げたときに「釣れた!」と言って一緒に喜び、腕を動かして調整する子どもの努力の姿を見て「頑張れ」と激励し、早く釣り上げたときに「さすが青さん」とほめたりすることは楽しい雰囲気づくりと最後の一匹まで釣り上げたいという動機づけの効果があった。

魚つりのコツを教えるには、直接に教えるという方法ではなく、年齢や個人差に応じた指導法が必要である。3歳児は自然観察では立って長い竿で普通の釣り方で釣り針を魚に近づけ、釣れなくても立ったまま釣っていた。参与観察では実験者が釣りやすくなるように魚の位置を変えてあげたが、その後、実験者の手本を参照して魚の位置を変えて釣る姿が見られなかった。しかし、5歳児の場合は実験者の行動を観察し、魚の位置を変える観察学習ができた。3歳児には観察学習が見られなかったのは釣り針の使い方に関心・気持ちは向いたのかもしれない。阿部明子・中田カヨ子の編著によれば3歳児は「教材や遊具に関心をもち、それをくりかえして使うようになる。はじめは思いどおりにできなくても、あきらめずに何度も扱うと、技能が

身についていく。そのために、じっくりと取り組める時間と場を保障しなければならない」。本実例からも遊具に関心が向くという3歳児の特徴が見られた。魚つりの遊具の使い方を学習内容として指導するのが望ましいだろう。

4歳児は自然観察の場面から竿に巻き込まれている糸の長さを必要な分だけ出して釣ったり、ゲームの場面では短い竿を試したり、釣り方に工夫する姿が見られた。うまく釣れなくても釣り続けている幼児に「短い竿を使う？」とヒントを示す質問をするという指導法は幼児の個人差を考慮した指導法であり、効果的であった。但し、ヒントを示す必要があるかどうかを判断するにあたって、4歳児の個人差例で述べたPさんのような子どももいる場合を考慮する必要がある。

5歳児は長い竿を使えるが、早く勝ちたいため、3歳児、4歳児のような釣り方をした幼児がいた。友だちから「ずるすな」という注意を受けた後でも注意を無視した場面があった。その場面では見守るという方法ではなく、質問の形で指導する必要がある。これは反省点の一つである。

4. 総合的考察

まず、布玩具の魅力については立体感のある布の魚や貝類の可愛さ、さらさらの砂、透明の石、本物の石、水色の箱は子どもの「水だ」、「ダイヤモンドだ」、「やった！デッカイ魚」、「貝だ」、「おもしろい！」という歓喜を引き出した。また、保育士からも「このような遊具は私たちが創るべきで日々の保育に追われてなかなかできないのが残念だ」、「第一印象はこの遊具の魅力に惹かれた」、「創るのが大変だったでしょう」と評価する言葉をいただいた。次に、布玩具魚釣り遊びについては、水族館のイメージと海で魚つりのイメージが幼児に浮かび、また、釣るときの真剣さと集中力が3歳児に、早く釣ろうとする意欲と努力が4歳児に、釣るコツを考える体験が5歳児に見られた。実験終了後の幼児の「もう一回やりたい!」、「面白かった!」、「笑顔」、「はしゃぐ行動」から対象の幼児にとって良い遊び体験になり学べるものがあったのではないかと考えられる。保育士から「教室に帰った後自慢していたよ」と聞き、幼児の喜びはこの研究内容の良さとして評価できるのではないかと考える。ところが、反省点と今後の課題もある。全年齢にとって長い竿が40センチでは、糸が27センチでは長すぎた。今後の課題として年齢によって竿及び糸の長さの改善、導入の言葉は年齢によって違うという発達過程への配慮などが残された。

まとめ

本研究は布玩具、操作遊びに着目して①布玩具魚釣りあそびから子どもの発達段階の違いの具体像を実例研究である程度明らかにすることができた。②子どもの年齢に応じた操作遊びの効果的指導法の具体像については、見守り、共感、励まし、称賛など誘導的な指導法の方が幼児の学習の動機づけとして大きな効果があり、魚つりのコツを直接教えることは幼児の年齢段階においては適切な指導法でないことが明らかにされた。同じ内容の実験的実例研究を他の2つの保育園でもすでに実施した。今後、各園の特徴及び共通点を検討する研究発表をしていく。試行錯誤的に行われた実例研究の課題と意義が発見されて、今後内容の精度を上げ、研究内容の充実と発展をしていきたい。

文献

- (1) 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）（案）文部科学省中央教育審議会、2005年。

- (2) 郭小蘭「学生の保育実践力を高めるゼミ研究の教学効果についての考察—幼児向け布絵本制作実践例」『会津大学短期大学部研究紀要』第72号、2015年。
- (3) ジャン・ピアジェ著 芳賀純訳 『発達の条件と学習』 誠信書房、1989年。
- (4) サンドラ・シュミット著 野村和訳 『幼児教育入門—ブルーナーに学ぶ』 明石書店、2014年。
- (5) 藤田文著「魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動：交互交代の基準と主導者に着目して」『発達心理学研究』18巻3号 2007年、227-235頁。
- (6) 阿南文・山内光哉「幼児の遊びにおけるルール共有過程の分析」『九州大学教育学部紀要：教育心理学部部分』34号 1989年、91-100頁。
- (7) 湯澤正通・湯澤美紀・渡辺大介「認知的道具の自発的使用と内化による概念発達：量概念の発達における重ね合わせと数の役割」『発達心理学研究』17巻2号 2006年、171-181頁。
- (8) 鈴木忠「幼児の空間表象と身体定位効果」『教育心理学研究』39巻2号 1991年、173-181頁。
- (9) 湯浅阿貴子「幼児のゲーム遊びに生じる「ずる」の実態と仲間との相互交渉による意識の変容—縦断的観察からのエピソード分析から—」『保育学研究』53巻3号 2015年、8-20頁。
- (10) 工藤俊郎・高井直美・上田恵津子・菅原康二 『基礎から学ぶ教育心理学』八千代出版 2014年。
- (11) 阿部明子・中田カヨ子編著『保育における援助の方法』 萌文書林 2010年
- (12) 民秋言など『幼児教育の方法』 北大路書房 2009年。
- (13) 郭小蘭編著 梅津まなみ・小椋澄佳・神永美槻・小出美桜花・佐藤果林・長澤彩夏・吉田結菜著「保育実践研究卒業論文集 2015」 郭ゼミ発行 2016年2月10日

付記

本研究にご協力いただいた会津若松保育協会若松第一保育園に深く感謝の意を申し上げます。

